

eeco

環境と経営の
未来を考える

4

CO₂
-25%
経済

特集 もはやエコは当たり前

ヒット商品は「3M」

レポート

環境債務とIFRS



好評連載中!

真山 仁の温暖化沸騰
改正省エネ法Q&A
ウソホント!? 環境の科学





P.23



P.44



P.121

CONTENTS

特集

もはやエコは当たり前

032 ヒット商品は「3M」

CO₂-25%削減

- 034 3つのM「めんどうくさい」「もったいない」「もたなくていい」
＜「めんどうくさい」にトコトコ付き合う＞
- 036 家電 人に代わってセンサーが省エネ
- 038 自動車 負担を感じさせずにエコ運転
- 040 食品 不満を快楽に変え支持集める
- 042 「もったいない」の真諦は「損が深い」
日用品 小型化対策が不可欠
- ＜「もたなくていい」価値観が浸透＞
- 044 カーシェアリング 「所有」から「シェア」への代表格
- 046 サービスマイキング 照明の機能だけを供給する
- 048 インタビュアー1 三浦麻氏 若者は「ムダ」への抵抗感がとても強い
- 049 インタビュアー2 中塚千恵氏 わかりやすい「お得感」が求められている



P.33

イラスト/川村 昌

レポート

126 環境債務とIFRS

資産除去債務はスタートライン

- 120 3R優待生 「再生かばん」テントの切れ端を再利用、廃棄物が1400万円の現金に
- 123 プロダクツ 「直管型LED照明」消費電力は蛍光灯の約半分、安全性の確保がカギに
- 125 フラッシュ (注目の技術・製品) 熱電発電、水と水蒸気を噴射する洗浄技術など

環境法を学ぶ

- 076 よくわかる環境法 「土壌汚染対策法①」自治体にかかる負担、汚染の把握は進むのか
- 078 改正省エネ法Q&A 第10回 「中長期計画書」の作成と提出に当たった注意点とは?
- 079 廃棄物処理法Q&A 第34回 新任担当者の教育で外せないポイントとは?
- 080 今月の環境法 グリーン購入法の基本方針を変更、環境関連産業の育成へ新法案

eco tech

- 005 環境特務 本田直之 レバレッジコンサルティング社長兼CEO
- 023 ecomom通信簿 洗濯すぎ1回のニーズ6割超
- 081 名作の中の環境史 最終回 【大学或問】熊沢晋山とエコロジー

今月の巻頭
ソーラー充電式携帯電話
シャープ(au, docomo, SoftBank)が発売であれはかばんをポケットにし、いつでも持ち歩いて使えて、常にバッテリー切れが気になるケータイにソーラー充電機能が付くのは合理的な発想だ。このケータイを指したソーラーケータイはどれもシャープ製。意外で興味とくれば夏の海辺からアルといった運動から散歩まで使える。いや、それ以前に太陽光

紙写真撮影/鈴木真一

P.12



- 010 温暖化対策に報告義務、自治体で相次ぎ条例化
- 011 エコプロダクツ 店頭に並出したOFP商品、普及に向けた2つの課題
- 012 3R 綿の古着からエタノール、年内にガソリン価格並みを目指す
- 013 自然エネルギー 住宅太陽光の環境価値を現金化、発電量の測定精度を巡り協議も
- 015 生物多様性 COP10に向け企業に動き、リスクとしての認識が広がる
- 017 エコカー 燃費を追求したトヨタの誤算
- 019 技術移転 中国特許訴訟で日本企業訴訟の「意味」
- 021 温暖化対策 重み増す「コペンハーゲン合意」
- 021 今月の排出量価格 日経・JIBC排出量取引参考気配

環境問題に迫る

- 058 貴山 仁の温暖化特講 第10回 樹本晃昇氏
- 063 ウンホント!? 環境の科学 「花粉症」完全に治す方法はあるのか?
- 162 失われゆく生物多様性 第10回 レッドラワン

コラム

- 005 環境特務 本田直之 レバレッジコンサルティング社長兼CEO
- 023 ecomom通信簿 洗濯すぎ1回のニーズ6割超
- 081 名作の中の環境史 最終回 【大学或問】熊沢晋山とエコロジー

環境情報サイト

ECO JAPAN

<http://eco.nikkeibp.co.jp/>

日経エコロジーを中心に日経BP社の専門雑誌の取材陣を生かして、広くビジネスパーソンの役に立つ環境情報をお届けしています。ぜひご利用ください。



2月1~24日に購まれた記事

- 1位 プリウスのブレーキ問題に見る燃費追求と安全、安心の境界
 - 2位 郊外化する環境市場 環境の意識が理解から撤退したワケ
 - 3位 エコカーの境界と「環境の一方通行」
 - 4位 発電だけでなく「古くて新しい」水素燃料の可能性
 - 5位 ほぼハイチの地産地消はひどいのか
- (記事をお読みになるときは、ECO JAPANページ内の「記事を探す」にタイトルを入力して検索してください)

綿の古着からエタノール 年内にガソリン価格並みを目指す

文/外園祐理子・本誌

古着の綿からバイオエタノールを生み出す技術が注目されている。経済産業省などが支援した「FUKU-FUKUプロジェクト」では小売店に集客効果も確認された。コスト削減のめどが立ち、事業化に踏み出す見通しだ。

衣料品のリサイクルは難しい。ペットボトルなどと違い、素材や形状が様々で、ファスナーやボタンなどの部品も多いからだ。

国内では毎年約200万tを超える繊維製品がゴミとして出される。このうち、雑巾などへの再使用や中古衣類として出回るのは全体の10～15%。残りは焼却などで処分されている。

そうした中で、繊維製品の6割を占める綿素材からバイオエタノールを生み出す技術が注目されている。細かく裁断した綿製や綿混合素材の古着を3日かけて酵素で分解した後、発酵させる。国内で廃棄されている綿製品120万tから約85万klのバイ

良品計画は国からの補助金の3分の2を広告費に当て、「FUKU-FUKUプロジェクト」の名称を決め、ポスターを制作した

オエタノールが生産可能という。

この技術を開発したのは環境コンサルティングなどを手がける日本環境設計（東京都渋谷区）。「衣料用の綿はバイオエタノールに最適。しかも古着は、同じくバイオエタノールの原料となるトウモロコシなどと違って、人間の食料とバッティングしない」と岩元美智彦社長は話す。

既に量産化プラント設計中

同社は、経産省などが支援する「繊維製品リサイクル・モデル事業」、通称「FUKU-FUKUプロジェクト」の事務局として、東レや帝人ファイバーといったメーカー、「無印良品」を展開する良品計画などの小売店と共同で、昨年8～10月と今年2月に衣料品回収の実証実験をした。

綿から生成したバイオエタノール

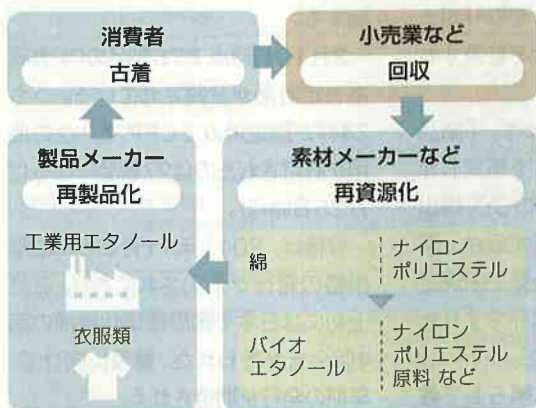


は、実験プラントのある愛媛県今治市のタオル工場で機械を動かす重油代わりに使う。回収したナイロンやポリエステルなどは、東レなどが再資源化する枠組みだ。

「昨年8～10月に関東の一部店舗で行った実証実験で、集客効果を確認できた」と良品計画企画室の赤峰貴子・環境広報担当課長は言う。衣類を捨てるのを「もったいない」と感じ、プロジェクトを好意的に受け止める消費者は少なくないようだ。

事業化の課題はコストだ。現在、このバイオエタノールは200円/ℓ前後だが、「2010年中にガソリンと同程度の約100円/ℓにできるめどを立てたい。工程短縮化などで、将来的にはトウモロコシを原料とする場合と同水準の50～60円/ℓにできる」と岩元社長。既に量産化プラントを設計中で、今春以降、古着の回収について大手量販店など数社の協力を得る話し合いを進めている。

●繊維製品リサイクル・モデル事業（「FUKU-FUKUプロジェクト」）の概要



実験を進めているバイオエタノール製造実証プラント（愛媛県今治市）

注）「無印良品」のチラシから編集部が作成